ワイド特集

18歳選挙権！といわれてみても・・・

中西又三 名誉教授 × 学生記者 内藤伊音 商学部2年

押しつけられた選挙権にしない

『18歳選挙』。学生記者対象の取材案内でこの言葉を聞いたとき、初めに思ったことは「久々に聞いたなあ」だった。

高校の公民の授業で聴いて以降、今まで18歳選挙について考える機会は、ほぼないに等しいものであったように思う。

政治的事柄に強く関心を持っている学生は別として、大学生の中で18歳選挙について詳しく知っているという人は少ないのではないだろうか。

私の周りの友人を見てみてもサークル活動やアルバイト、資格取得の勉強などで忙しく、家に帰って、ゆっくり新聞やテレビを見る時間のある人はなかなかいない。私もその１人である。

一方で18歳選挙が実施される日は近づいている。私は中西又三・中央大学名誉教授（行政法）に選挙についてのお話を伺った。

気に掛かっていたのは、選挙当日は必ず予定を空けておかなければならないのかということだ。大学生ともなるとゼミやサークルの合宿、友人との旅行などで家を空けていることも多い。正直に言って選挙のためだけに予定をずらすというのもなかなか厳しいのが実情である。

また、中大生の中には大学から１人暮らしを始めていて、住民票を移していないという人も多いのではないだろうか。

中大下宿生のうちの７～８割は住民票を親元などにおいたままのようだ。選挙の投票は、住民票のある地域の投票所で行うのが基本だが、選挙のためだけに帰省できる人は少ないだろう。

ほかにも１人暮らしや引っ越しなどで住居が変わり、住民票を移してはいるもののまだ３カ月たっていない人も、選挙ではもともと住んでいた地域で投票するという。

さまざまな事情を抱えている人が皆一様に選挙に参加するために、期日前投票や不在者投票といったシステムが用意されている。

前者は当日何らかの用事があり投票に行けない人が事前に投票できるというものだ。後者は、親元や以前住んでいた地域の投票所に行かなくとも、あらかじめ申請して、親元など地方の選挙管理委員会から、投票用紙などをもらい、今住んでいるところで選挙に参加できるシステムである。申請する手間が多少かかるものの、しっかり活用すれば誰もが「切れ目なく」選挙に参加できる仕組みがあることに安心を覚えた。

次に不安に思っていたことは、「政治に詳しいわけでもない自分が、本当に適切な選択が行えるのか」ということである。

政治に興味を持っているわけでもなく、ニュースを見る機会も少ない私にはどの政党や政治家がいいのか、何を判断基準に決めるべきなのかさえ、まだよくわからない。

こんなにもあやふやなまま、なんとなく選挙に行くぐらいなら投票しない方がよいのではないかと思い、思い切って中西先生に尋ねた。

法学部の先生ということもあって、「選挙の前にしっかり調べてから投

どうしたらいいだろう?　とまどっている人が多いのではないか。「選ぶ」といっても基準がわからない!

自分は田舎の実家から住民票を移していない。投票できるのだろうか?　いろいろな疑問がわいてくるだろう。では疑問解決のため「選挙の先輩」である大学の先生、選挙に熱心に取り組んでいる学生に聞いてみてはどうだろう?　そう考えて生まれたのがこの企画である。ご協力いただいたのは、中西又三名誉教授(行政法)、大田美和教授(英文学)、宮本太郎教授(政治学)、柴田憲司助教(憲法)、学生サークル「Vote at Chuo!!」のメンバー。

さあ、とまどっているあなた、一緒に考えてみよう!

票しなさい」「大学生にもなってそういった考えも持っていないという方がおかしい」というような答えが返ってくると思っていた。

しかし先生の答えは私にとって非常に衝撃的なものだった。というのも先生の答えが私の予想に反して「なら、少しでもマシだと思う方に入れればいい」というものだったからである。

これを聞いて私は、妙に入っていた力が抜けていった。

先生はこうも仰った。「選挙で『どの政党がいい』『誰の政策が一番だ』なんて、はっきりした意見を持っている人は大人でもかなり少数。実際それに正解があるわけでもない。だったら、自分が興味のある分野についての政治家の意見だけを参考にして投票することだって構わない」

実際、先生ご自身が初めて選挙に行った時も、新聞などの見出しや候補者の評判を聞いて「なんとなくこの人」という感じで投票したという。

年を重ねるごとに分かることも多いため、いまそこまで焦ってすべてをわかろうとする必要はないのだそうだ。

大事なことは、何と言っても大学生は初めて自分で自由に調べ、考え、判断できる環境に置かれているということ。それを大事にして行動して欲しい、と教えていただいた。

私自身、次回の選挙が「初めての選挙」ということで余計な気構えばかりが先行していたのだと思う。

率直に言って、興味もないことについて調べ、考えたくもないことを考えて、わざわざ休日に予定を開けて投票に行くことを思うと気掛かりなところや怖いという思いもあった。

しかし人生の大先輩でもある先生からこのように助言をいただいたことで、むしろ私は「早く選挙に行ってみたい」と思った。

まずは興味のある分野から自分の意見を国政に伝えられる場なのだとわかり、選挙を楽しみにする気持ちも生まれたのだ。

最後に、先生へのインタビューの中で一番心に響いたことを紹介する。

「この18歳選挙権を『押し付けられた選挙権』にしないでほしい」という言葉だ。今回の選挙権年齢の引き下げというのは、18歳～19歳の人々が自ら声をあげて獲得したものではない。

どちらかというと、国から勝手に課せられたものである。中西先生のお話ではこれには自分の思い通りに国政を動かそうとする政治家の策略も絡んでいるという。

確かに18歳～19歳というのは政治に対して高校程度の知識しかない人が多く、それ以上に深く考えている人は全国的にも少ないと思われる。

こういった人々が政治的判断をしようとするとき、大きくマスメディアで取り上げられている意見をそのまま自分の意見としてしまう。逆に政治家からすれば「操りやすい人々」なのである。

もちろん18歳選挙の導入にはもっと多くの要因があるとは思うが、このように利用されかねない一面もあると知った以上は黙ってもいられない。高校生が反対デモを行うなど、利用しようと考えていた政治家の思惑とは違う動きも出てきている。

とらえ方を変えればこの選挙は「若者だってしっかり考えられるんだ」ということを世の大人たちに見せつけるチャンスなのではないか。

たまたまではあるが、今までよりも２年早く与えられた選挙権。面倒くさがらず、怖がらず、「選挙への参加ができるなんてラッキーだなあ」いう気持ちで18歳選挙に臨みたい。

大田美和 教授 × 学生記者 長塚優佳 文学部2年

選挙権のありがたみを考える

私はずっと18歳以下に選挙権が引き下げられたことに疑問を持っていた。

別に私が行かなくても勝手に結果は出るし、私の１票が大きな影響を与えることもないだろう。だったら、引き下げられたところで行かなくてもいいし、そもそも誰に入れたらいいのかもよくわからないし…。

このようなことを思っているのは私だけではないはず。しかし、大田教授のお話はそんな考えを一蹴してくれるものだった。

先生は第二派フェミニズムのスローガンを教えてくれた。「個人的なことは政治的なことだ」という発言だ。

政治というのはどこか他人事で自分たちに関わりのあるようにあまり思えないかもしれない。ましてや大学生の今は余計に政治というものは硬くて難しいもののように感じるだろう。

しかし、最近でいうと「保育園落ちた日本死ね!!!」という保育園の数が足りていない現状への怒りを書いたブログが話題になった。

これは今起きていることだが、5年後・10年後・何十年後には私たちも、もしかしたら保育園の数の少なさに嘆き苦しんでいるかもしれない。

今、ぼんやりとしか考えていない将来への不安や不満も政治に関わることかもしれない。そう考えると今、選挙に参加する必要はないかもしれないけれど、私たちのこれからに関わる問題がすぐ近くに山積みになっているように思える。

「私が幸せになるために私は政治的になる」。こんな言葉も先生は教えてくださった。作家でカウンセラーの安積遊歩さんの言葉だ。今すぐには政治は変わらない。だからこそ将来につなげるために今から考えていくことが求められているのだと思う。

とは言っても、わざわざ18歳に引き下げなくても、と思う人もいるだろう。私は先生とお話をさせてもらって、そんな疑問を持つこと自体無意味だと感じた。

今、私たちは男女が平等に選挙権を持っていることを当たり前のように受け入れている。しかし、たった70年ほど前には日本の女性は選挙権を持っておらず、苦しい思いをした。

先生によればイギリスでは選挙権獲得のために命を投げ捨てた女性もいるとの話だった。そこまでして手に入れ、当たり前となった選挙権についてもう一度考えてみたい。

なぜ、18歳に引き下げたのだろうか。なぜ、今から政治について考えなければいけないのだろうか。

決して当たり前ではない「選挙権」というものを時間に余裕のある大学生のうちによく考え、そして何より参加してみるというのが大事なのだと思った。

私たちの生活に大きくかかわる「選挙」というものに参加させてもらえるありがたみを感じて参加したい。

その１票は決して大きくはないけれど、生活を変えうる私たちの思いを乗せる大切な1票なのだから。

大田教授と学生記者・長塚（右）

宮本太郎 教授 × 学生記者 高瀬杏菜 法学部4年

政治を広くとらえる大切さ

宮本教授と学生記者・高瀬（右）

３年前の夏の授業がよみがえる。１年生の春学期に履修した、政治学の宮本太郎教授にお話を伺う機会が巡ってきた。テーマは18歳選挙権。私は、若者がシルバーデモクラシーをひっくり返すきっかけになるのではないかと考えていた。

その考えは間違っているという。それが教授のご指摘だった。

教授によると、シルバーデモクラシーとユース・デモクラシーは対抗するものではないという。さらに、人口比を考えても、若者が今の状況を大逆転させるのは難しいという。

では、今回の18歳選挙権引き下げは何をもたらすのだろう。

ポイントは２つあると教授は語る。まず第１に、民主主義を問い直すきっかけになること。そして第２に、自分が社会とどう関わるかを真剣に考えるきっかけになること。

第２の点について言えば、例えば街づくりへの関わりも、若者が政治を考えるきっかけになるだろうと言われる。確かに、街づくりは変化も感じやすいのでその分、関わりがいも大きいだろう。さらに、中央の政治よりはとっつきやすい感もある。平和は足元からというが、政治も足元からがいいということなのか。

教授のお話の中でとりわけ興味深かったことは、若者にとっての政治を投票に還元しない方が良いという考え方だ。私たち世代は、投票に行く意味をまだ見いだせていないのだからなおさらだ。投票だけが政治ではない。街づくりも政治だ。政治を広く考える必要があるということだろう。

教授はまた、選挙権だけではなく、被選挙権の引き下げを考えても良いのではないかと言われていた。このご指摘も強く印象に残っている。

さらに政治教育の問題がある。一部の高校では、授業の一環で模擬投票が行われている。しかし教育現場には戸惑いもある。政治というある種のタブーにあえて触れるのだから、教える側もヒヤヒヤしているらしい。また、公平中立に教えることへのプレッシャーもあるだろう。

これに対して教授が強調されていたのは、「ある一瞬を切り取って公平中立かを判断するな」ということである。授業時間中のある瞬間の先生の発言を捉えて、公平中立かどうかを判断するのではなく、政治や選挙についての学校教育全体で、特定の考え方だけでなく多様な立場や見解が取り上げられることが大切なのだ。「教育はおおらかになされるべきだ」、それが教授のご意見である。

今回の取材を通して、政治を広く捉えることの大切さを知った。教授が言われたように、政治＝投票という概念をリセットするきっかけになればいいと思う。

今の18歳が大人になった時、未来の18歳に、今回の出来事について語れる日が来ることが今から楽しみである。

柴田憲司 助教 × 学生記者 野村 睦 法学部4年

柴田助教と学生記者・野村（手前）

構えすぎずに まず1票

国政選挙が話題に上がると同時に「18歳選挙権」のニュースをよく目にするようになった。18歳となると早ければ高校３年生が選挙に行くようになるということだ。

果たして自分が高校生の時にどこまで選挙や政治に関心を持っていたのだろう、とふと思い返してしまう。

初めて投票に行った選挙のことも思い返してみた。恥ずかしいことに、誰になぜ投票をしたのか全く覚えていない。初めて選挙権を持ったことだし、なんとなく投票してみよう、そんな思いだったのだろう。初の選挙を控える人の多くがその“なんとなく、よく考えずに投票すること”に対して不安、と感じているといった記事を目にした。

では、どのような準備をして選挙に臨めばよいのだろうか。憲法学の柴田先生に伺った。

以下、柴田先生のお話をまとめてみた。

18歳になると成人とまではいかないが、自由にできることの幅が広がる。その一方で、情報を誰かが与えてくれるまで待つのではなく、主体的に自分で取りにいくといった姿勢が求められるようになる。

選挙に関しても同様である。それが「主権者」・「公民」というものだ。

しかし、そこで選挙に向けて情報を完璧に集めなくては、とハードルを高くする必要はない。

情報を集める入口は何であっても良いのだ。まずは肩の力を抜いて、気楽に何かニュースを一つ調べてみる。もちろんそれは、若者が大好きな「スマホ」から気になったネットニュースを読むのでも良い。そこで重要なことが2点ある。

１点目は、そのニュースに対して自分の意見をもってみることである。その意見は後に変わってしまうかもしれない、それでも良いのだ。まずは、気楽にどう思ったのか意見を持ってみることが重要である。

２点目は、そのニュースに対してどういった意見や考えを持っている人がいるのか、その記事からさらにページをとんで少し深く読んでみることである。その意見に対して自分はどう考えるのか、まで考えられたらなお良い。

しかし、ここで気をつけなくてはいけないのが手軽さの裏に潜んだインターネット上でのなりすましや誤った記事である。そういった記事に惑わされないよう本質を見極めることが重要である。

見極める１つの手段として、一次資料に目を通すことを欠いてはいけない。故意に誤りを与えるように文を引用していないか、誤ったことを書いていないか自身の目で確認することも大切だ。

次に、もう少し選挙に関心を持つようになったら選挙候補者のブログや、党のマニュフェストをホームページで見てみると良い。

これも隅から隅まで読もうとするのではなく、１～２分程度の短時間で気になったキーワードを拾い読みしてパッと見るといった程度でまずは十分だ。その中で賛成できるものには○をつけ、○のついている数を比較してみるのも良い。

他にも予算委員会の国会中継をテレビで見てみたり、街頭演説に耳を傾けてみたりするのも良いだろう。こうしてニュースなどを少しずつチェックするのを習慣にすると、テレビドラマの続きが気になるのと同じように、政治ニュースの続きも毎日だんだん気になり始め、自然と関心が向くようになる。

ここで重要なのは、繰り返しになるがまずは気楽に、そして最初から完璧を目指してはいけないということだ。

少しだけ自分の考えと似ている人になんとなく１票を入れてみる、ここの部分の考え方に賛成するからなんとなく１票を入れてみる。そんな気楽な気持ちから、まずは１票、自分の「今の」考えを意思表示することが大切だ。

中大学生サークル
Vote at Chuo!!

× 学生記者 **片桐将吾**
法学部2年

政治に疎いタイプも巻き込む

「投票、余裕だな…」―。5月26日、中央大学多摩キャンパスで、学生サークル「Vote at Chuo!!」のメンバー4人とわいわいと話をしながら、ふと思った。

「Vote～」。名前からして“ガチ勢”決定に思えるこの団体に、取材することが決まってから、どのようなメンバーなのかなと少し考えたりもした。今回の取材方針～等身大でインタビューする～もあり、下手な知識をつける必要もなかったので、下調べはしなかった。

胸中で〈開口一番、演説調で語りだしたりはしないよね…、たぶん…〉などの思いもあったが、開けてびっくり。

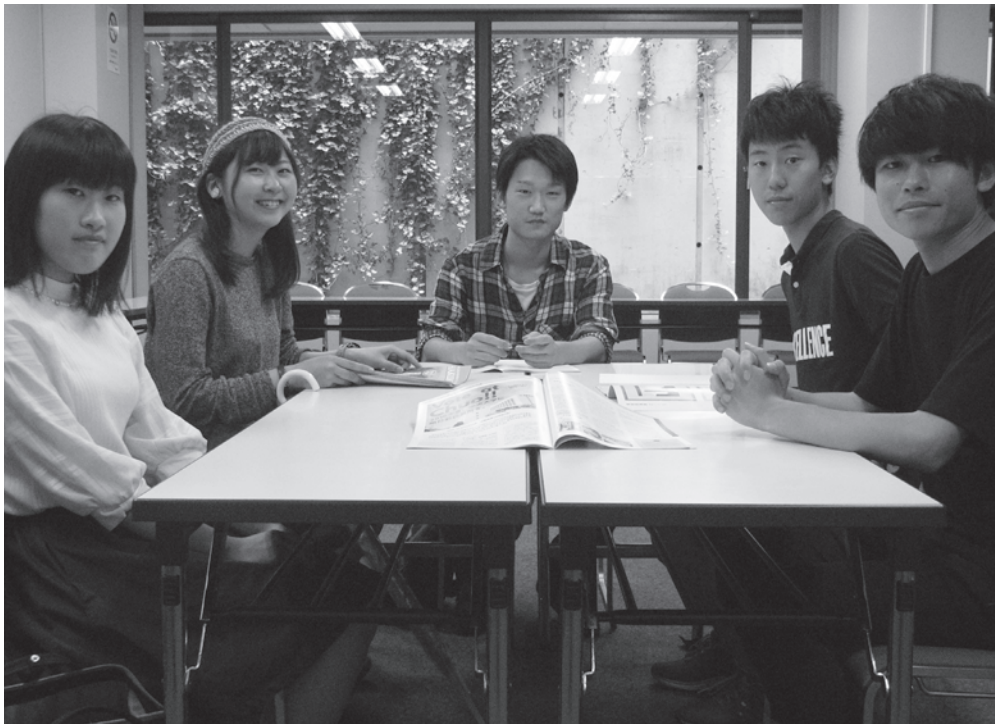
リーダーの古野香織さん(法3)は森ガールなファッションで、昨日、学内ですれ違ったかもしれないくらいの「大学生」な感じだった。

渡辺兼成さん(商3)も小山(おやま)貴央さん(法3)も片山歩美さん(法1)も、みんな和気あいあいとしていて、“ガチ勢”な雰囲気はなかった。

「投票が余裕」なんて思ったのは、取材を始めてから割とすぐのことだった。

投票についての取材だったから、一からフローチャート的に投票までの流れを教えてもらおうかな、などと考えていたのだが、「Vote～」が公示日(立候補の届け出をする日)以降にペデ(ペデストリアンデッキ＝遊歩道)の下にブースを出し、そこで一から十まで教えてくれるとのことだったので、僕の目論見(もくろみ)は一瞬で瓦解した。

大学生は大学と友達の家によく行きます。さすがの僕でも、語学と体育がある日は割とまじめに行っていま



学生サークル「Vote at Chuo!!」、この日は4人が集まった。
左から片山さん、古野さん、学生記者・片桐、渡辺さん、小山さん

もっと知りたい へぇ～

Vote at Chuo!!

「Vote at Chuo!!」は、「中大生3万人が当たり前に考えて投票に行く文化を創る」ことを活動の理念として、2015年4月16日に設立された。活動目的は「若年層の政治無関心と投票率低下問題の解決」。中大付属校などでは主権者教育を実施。メンバーは中大生38人。

メンバーの1、2年生は6月、東京新聞の「18歳選挙権」企画に協力して、社会保障や雇用について紙面展開した。
Twitter@voteatchuo

す。友達の家に関しては皆勤賞かもしれないけど…。

大学に行けば、投票までの流れを教えてくれるというのです。われわれのような政治に疎いタイプの大学生が、自らの権利を行使するにはこれしかない。

「Vote～」のように政治に関心を持ち、勉強して、中大生のみんなと一緒になって、政治や選挙への疑問・不安を共有する。その一つでも解決へ導くことができればいい・・・という思いの大学生に教えてもらうのです。

つまり、私たちがすべきことは「Vote～」のブースに行くこと！　あとは、みんなに内緒で政党を選んで、投票するだけ。これで僕らも権利を行使した立派な大人になる。

それにしても、「Vote～」のメンバーはすごい。そもそも、どういう動機で活動を開始したのだろうか。古野さんは「学生で選挙を語ると意識高い系に見られることに違和感があった」と言う。たしかにそれはありますよね。「Vote～」という名前を聞いたときに、僕も「あ、意識高い系だ」と思ってしまいました。

彼女らは「気軽に政治問題を話すことができる空気を作ること！」を活動目標の一つにしている。その目標を達成するために、中央大学の付属各高との連携を強めている。大学生と高校生が意見を交換し、互いに知見を深める。

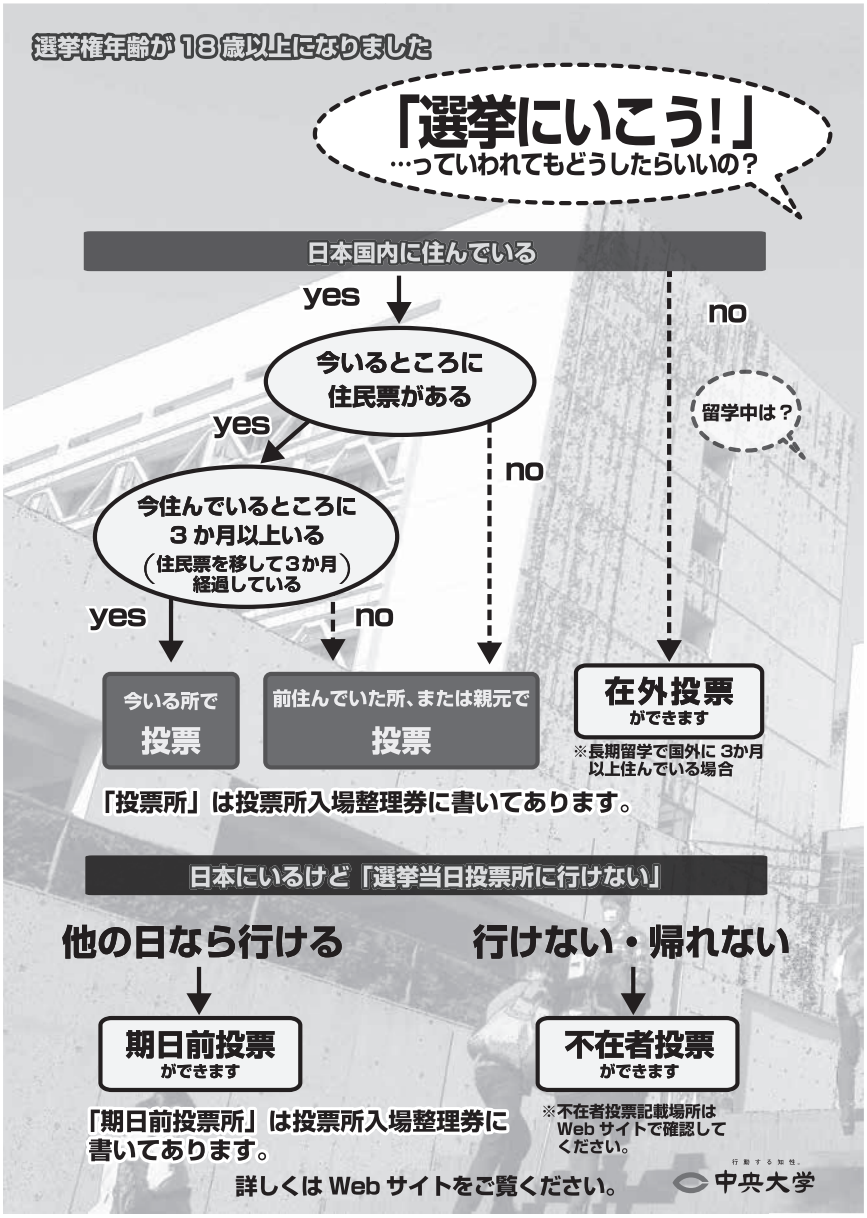
「学校がタブー視してきた政治にかかわる問題を学生に対し、今度は積極的に興味を持てだなんて筋違いな話」と言う古野さん。

学校がタブー視するなら私たちが、という姿勢は本当にすごい。軌道に乗れば、中大生が中大付属４校の高校生と話し合い、学年が上がって、今度は当時の高校生がその後輩たちと話し合うかもしれない。そうして交流が続いていく。

古野さんたちのまいた種が、一つの伝統を築き上げる。すると、もっと社会に誇れる中央大学になるに違いない。

なんだかワクワクくしてきます！伝統の第一歩は、「Vote～」に引っ張られているとはいえ、私たち中大生が担うものだ！

公示後、ペデ下の「Vote at Chuo!!」のブースに集合です！



大学でもHPで、フローチャート（左）、選挙・不在者投票の方法、選挙運動についてサイトを設けています。ご覧ください。
疑問は学部事務室などでも受けています。

総括

北 彰 教授

騙される愚かな民の一人になるな

さて、ここまで読んでくれたあなた。

選ぶ基準が少しでもはっきりしてきたろうか？　「不在者投票」や「期日前投票」などが理解できたろうか?

この企画の目的、それは「自分の頭で考えて投票するようになってほしい」ということだ。「そんなことは言われなくともわかっている」、とあなたはきっと言うだろう。でも待ってほしい。

今あなたが当たり前のものとして享受している普通選挙。その普通選挙は、昔は普通のものではなかった。人々が勝ち取ってきたものなのだ。

例えば女性が投票できるようになったのはつい70年ほど前だ。それまでは女性には選挙権がなかった。男女が平等でないなど、今では信じられないだろう。なぜ女性に選挙権がないのが当たり前だったのだろう?

あるいは、1925年までは、国税を納めていない者に選挙権はなかった。国の予算は、税金で作られている。なら税金を納めている者だけに選挙権があっても不思議ではない。なぜその制限を取り払い、普通選挙権が認められたのだろうか?

そんなことをあなたは疑問に思ったことはないだろうか?　もし思ったことがないのなら、その疑問の答えを見つけてほしい。それともそんなことは「言われなくともわかっている」のだろうか?

宝を宝とも思っていない人が宝を持っていても、それは宝の持ち腐れだ。あなたは宝を無駄にしてはいないか?

それともあなたは、自分が投票しようとしまいと政治は変わりようがない、自分の１票で政治がどうなるというのだ、と早々と政治や自分の1票に絶望しているのだろうか。自ら行動することを全くせずに?

自分の意思表示をしない。それは自分の人生を他人に任せ切ってしまうということだ。あなたはそれで本当に平気なのだろうか?

政府や政党は自分たちの思うように政治を動かしたいと思っている。人の心をつかむために彼らは宣伝をする。どんな宣伝をするのだろう?

１．宣伝のターゲットは、大衆の中でも１番知的に低いレベルに合わせる。決してインテリを相手にしてはならない。２．知性に訴えるのではなく感情に訴える。３．同じことを繰り返し言って、最後の一人までもがすぐその宣伝コピーを復唱できるまでにする。なぜなら大衆の記憶力は僅かだが、忘却力は限りなく大きいからだ。

この３原則を守り、実に効果的な宣伝を展開したのがヒトラーだった。ナチ党は第１党となり、授権法を国会で通し、独裁体制を築いた。そして自分たちの思うように国の政治を進めたのだ。今の日本よりも民主主義的なドイツで。

つまり国民は騙されやすいものなのだ。政府や政党は自分を騙すものだ、と警戒していたほうがいい。

あなたには、騙される愚かな民の一人にはなってほしくない。

繰り返そう。それがこの特集の目的である。